広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中世ギリシヤ語叙事詩『ディゲネス・アクリタス』における Comitative-Instrumentalの表現形式について
Author(s)	橘, 孝司
Citation	ニダバ , 17 : 21 - 33
Issue Date	1988-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047189
Right	
Relation	

論　文

中世ギリシャ語叙事詩『ディゲネス・アクリタス』における Comitative-Instrumentalの表現形式について

橘　　孝　司

§1．はじめに

本稿でとりあげる中世ギリシャ語叙事詩『ディゲニス・アクリタス』はビザンツ民衆文学の傑作の一つであって、11世紀頃原本が成立したとされ、六つの異本により今日に伝わっている。ここでは、それらの異本のうち、もっとも長い行数を持つAndros版を研究対象とする[1]。

さて、この叙事詩は、Comitative－Instrumentalの主なる表現手段として、次の四つの形式を含んでいる。

1．前置詞μετά＋属格形[2]

2．前置詞μέ　＋対格形

3．前置詞σύν　＋与格形

4．与格形

このうち、3.と4.とは古代ギリシャ語の形式であり、通時的変遷の中で与格形が消失するとともに、今日では失われてしまった。2.は現代ギリシャ語の形式であり、このμέは1.のμετάからhaplologyにより生じたとされる[3]。1.は古代語にすでに存在しており、3.4.と競合していたが、アッティカ散文においてはこれらより優勢[4]、コイネーにおいて、Comitative-Instrumental表現形式の主流の一つをなす[5]。これらを図示すれば、次のようになろう。

古代語		現代語
μετά＋属格形	⟶	μέ＋対格形
σύν　＋与格形	⟶	消
与格形	⟶	失

本稿の目的は、このうち、1.と2.の形式が、『ディゲニス・アクリタス』において、いかなる意味特徴に基づいて使い分けられているのかを示すことにある。3.4.については、§5で少し触れることになろう。

§ 2. μετά・μέとanimacy（有生性）

『ディゲニス』を読んでいて気づくのは、μετά＋属格形の使用が非常に多いことである（のべ総数295例）。一例を示すと、

(1)μόνος εἰσῆλθεν μετ' αὐτῆς εἰς τὸ κουβούκλι μέσα. 890

「彼は一人彼女ととも に寝室へ入った。」

(2)λέγει δὲ ταῦτα πρὸς αὐτὸν μετὰ χαρᾶς μεγάλης. 2160

「大いに喜び彼に向かってこう言う。」

(3)μετὰ πολλῆς δυνάμεως ὥρμησαν πρὸς ἐμένα. 3157

「力をこめて私を攻撃した。」

これに対して、μέ＋対格形の使用例は少ない（のべ総数72例）。例えば

(4)καὶ εἰς ποτάμιν ἔπεσεν ὁμοῦ μὲ τ' ἄλογόν του. 3654

「そして自分の馬もろとも河へ落ちた。」

(5)τριανταφυλλιά μου κόκκινη, βασιλικὸς μὲ τ' ἄνθη. 1973

「私の赤いバラよ、花をつけたメボウキよ。」

(6)ἐκείνη δὲ ἐσπούδαζε κρούειν μὲ τὸ κοντάριν. 3582

「彼女は槍で打たんとした。」

上に掲げた例のうち、(1)(2)(4)(5)はComitative, (3)(6)はInstrumentalの機能で用いられており、μετά、μέともに同じ機能をもっているように見える。ところが、μετά、μέが支配する項に注目すると、(1)のαὐτῆς「彼女」は代名詞で人間を指しているが、(4)のἄλογον「馬」は名詞で動物(人間以外の動物の意。以下この意味で用いる。)を指す。(2)χαρᾶς「喜び」、(3)δυνάμεως「力」は抽象名詞であるのに対し、(5)ἄνθη「花」、(6)κοντάριν「槍」は具体名詞である。そうすると、前置詞句内の項の意味素性によって、μετάとμέが使い分けられているのかもしれない。そこで、μετά、μέと結びつく項を、代名詞、人間名詞、動物名詞、無生名詞に分けて、それらのリストを掲げていくことにする。

まず、μετά、μέと結ぶ代名詞とその使用頻度は以下の通りである。

	μετά ___	μέ ___
人称代名詞	34	1
指示代名詞	10	3
再帰代名詞	3	0
関係代名詞	1	1
不定代名詞	1	0
計	49	5

μετάの使用例はμέのほぼ十倍である。注目すべきは、μέと結び付く人称代名詞の例が一

例しかない。これに対し、μετάは人称代名詞の全ての人称・数の屈折形と結びつく。

(7)εἰ δὲ οὐκ ἔρχει μετ' ἐμοῦ, εὔχου μ' ὅτι κηταίνω. 1130

「もし私といっしょに来てくれないのなら、私のことを祈り給え、
私は行くのだから。」

(8)καὶ μετὰ σοῦ κορεύομαι, υἱέ, εἰς Ρωμανίαν. 1172

「そして息子よ、お前といっしょにロマニアへ行こう。」

(9)ἵνα συγχαίρῃς μετ' αὐτοῦ, τινὰν νὰ μὴν φοβῆσαι. 4549

「汝が彼とともに喜びあい、誰をも恐れることがないように。」

(10)καὶ φανταστία μεθ' ἡμῶν τὸν πόλεμον νὰ κάμῃ. 3274

「（彼はさながら）我々と戦いをなす幻影（であった。）」

(11)ἀλλὰ ζητῶ γενέσθαι / τόρα εἰς ταύτην τὴν μονὴν
μεθ' ὑμῶν ἀκελάτης. 1606－07

「今この隠れ家であなた方といっしょに盗賊になりたいのだ。」

(12)σὺ μετ' αὐτῶν ἐτόλμησας μάχην ἐκινδυνάψαι. 3058

「お前は彼らとあえて戦いをなした。」

『ディゲニス』の中で、動物はしゃべったり、話に耳を傾けたりしないから、人称代名詞の一、二人称は全て人間を指す。三人称及びそれ以外の代名詞も二例を除いて、その指示物は人間である。そして、例外であるその二例とは、

(13)ἵππους δοκίμους φέροντας καὶ ἅρματα μὲ τοῦτα, [6] 3453

「訓練された馬をつれ、それらとともに武器を携えて」

(14)Αὐτὰ εἶναι, ὦ κράτιστε, ἔργα δικαιοσύνης, / μ' αὐτῶν καὶ πάντας
τοὺς ἐχθροὺς ἔχεις νὰ ὑποτάξῃς. 2396－97

「それらは、全能の皇帝よ、正義の業であり、それらによりて、あらゆる敵を征服することができましょう。」

のように、「馬」「正義の業」を指す場合であり、いずれもμετάではなくμέが用いられている。（(14)は先に触れた、μέと結びつく唯一の人称代名詞の例である。）

このように、主に人間を指す代名詞とμέは結びつきにくく、代名詞が人間以外を指す場合にはμέの方が用いられるという点から、μέはhuman（人間）という意味素性とは結びつきにくいのではないかと考えられる。

それでは、人間名詞とμετά、μέの結合状況はどうであろうか。

μετά			μέ		
κόρης	「乙女」	1 2	κατέρα	「父」	2
κοθητῆς	「恋人」	7	ἀδελφούς	「兄弟」	1
ἀδελφῶν	「兄弟」	5	ἀνδρειωμένους	「勇者」	1

μητρός	「母」	4	γενεάν	「一族」	1
πλήθους	「群集」	4	γυναῖκας	「女」	1
θυγατρός	「娘」	4	στρατιάν	「軍隊」	1
λάων	「民衆」	4	φουσσάτα	「兵隊」	1
Μελεμέντζη	「メレメンジス」	3			
τέκνων	「子供」	3			
Ἰωαννικίου	「ヨアンニキオス」	2			
υἱοῦ	「息子」	2			
συζύγου	「妻」	2			
φιλτάτου	「最愛の人」	2			
ἄρχοντων	「高官」	2			
ἀλλοφύλων	「異民族」	1			
ἀνδρός	「夫」	1			
ἀκελατάς	「盗賊」	1			
ἀρχοντοπούλων	「高官の息子」	1			
αὐθέντος	「主人」	1			
γυναικαδέλφους	「妻の兄弟」	1			
γυναικός	「妻」	1			
θεόν	「神」	1			
κατακρίτων	「罪人」	1			
οἰκείων	「召使い」	1			
πενθερᾶς	「義母」	1			
πενθερός	「義父」	1			
πατρός	「父」	1			
πλείστων	「大多数の人々」	1			
σατραπῶν	「総督」	1			
στρατιωτῶν	「将軍」	1			
συγγενῶν	「親族」	1			
φίλων	「友人」	1			
φουσσάτων	「兵隊」	1			
ὑμνῳδῶν	「賛美歌の歌い手」	1			
計		76	計		8

μέ の総数は代名詞の場合よりも若干増えているが、μετά に比べれば、依然少数派である。

ここでは、固有名詞と結びつく μέ の例がない点が注目される。μετά と結んだ固有名詞には Μελεμέντζη（三例）、Ἰωαννικίου（二例）がある。

(15) πρός με καλῶς ἐξήρχοντο <u>μετὰ τοῦ Μελεμέντζη</u>. 3418

「（彼らは）<u>メレメンジスといっしょに</u>私の方へやってきた。」

また、γενεάν「一族」、στρατιάν「軍隊」、φουσσάτα「兵隊」などの集合名詞とμέの結合も目を引くが、μετάもκλήθους「群集」、λάων「民衆」などと結びついている。しかしながら、同一の述語にμετά・μέ句が同時に結びつく時、両者の差異が明らかになると考えるならば、(16) は面白い例を提供する。

(16)καὶ ὁ πατήρ μου τόρα ἦν <u>μετὰ τῶν ἀδελφῶν μου</u>,/<u>μὲ ὅλην μου τὴν γενεάν,</u>
<u>καὶ πάντα τὰ φουσσάτα</u>. 2210−11

「私の父は今頃、<u>私の兄たちとともに</u>、<u>私の全一族そして全ての兵隊たちといっしょに</u>いることでしょう。」

ここで詩人が、μετάとμέを同時に使っているのは、おそらく、表現に変化を与えんがためであって、それ自体は別に不思議ではないが、その場合に、特定の人間を指す ἀδελφῶν「兄たち」をμετάと結ばせ、集合名詞 γενεά、φουσσάταをμέと結ばせており、その逆ではない点に注目したい。

もう一つ興味深いのはγυνήという語で、μετά、μέと結びついた例が一つずつある。

(17)καὶ καθ' ἑκάστην ἔχαιρε <u>μετὰ τῆς γυναικός του</u>. 1571

「そして毎日<u>自分の妻とともに</u>楽しく過ごした。」

(18)ἀλλὰ οὐδόλως πόλεμον νὰ στέσουν <u>μὲ γυναῖκας</u>. 3758

「しかし<u>女と</u>戦いを交えることも（男のなすわざではない。）」

γυνήは「女」「妻」の両義があるが、μετάと結んだ(17)の場合、ある人の具体的な「妻」を指すのに対して、μέと結んだ(18)の場合は、「女」の意味で総称的に用いられている。

代名詞のところで見たhumanという意味特徴をanimacy（有生性）として拡大して考えるならば、このような、集合名詞・総称的用法とμέの結びつきやすさ、人間名詞・固有名詞とμέの結びつきにくさ、代名詞とμέの結びつきにくさは意味論的に関連づけられるように思われる。つまり、前二者は後三者に比べて、animacyが低いと考えられるから、μέはanimacyのより低い項と共起しやすいと言えるのではなかろうか。そうすると、動物名詞・無生名詞と結ぶμέの例は多くなければならないことになる。そこで次に動物名詞を見てみよう。

μετά			μέ		
ἱεράκων	「鷹」	1	ἄλογον	「馬」	2
μουλαρίων	「騾馬」	1	ἵππους	「馬」	1
λεόντων	「獅子」	1	σκύμνον	「幼獣」	1
ἀρκουδοκούλον	「子熊」	1			
ἵππων	「馬」	1			
計		5	計		4

全体数が少ないが、μετά、μέ ともにほぼ同数の用例が見出された。例として以下のものを掲げておく。

(19) Ἄρκούδα δὲ ἡ θηλυκὴ μετὰ ἀρκουδοκούλου/μεγάλα αὐτῇ ἐφώναξε καὶ ἔφθασε κρὸς τοῦτον. 1431－32

「雌熊は子熊といっしょに、大きく吠えて彼の方へやって来た。」

(20) εἶδον δὲ λέαιναν σκληράν, ἐκάθευδε μὲ σκύμνον. 1472

「(彼らは)獰猛な雌獅子が、子獅子といっしょに眠っているのを見た。」

最後に無生名詞との結合例を見てみよう。ここでは、μέ は μετά より少ないとは言え、ほぼ半数に及ぶ例が見出される(μετά：115例, μέ：55例)。しかも、具体的な事物を指す名詞と μέ は多く結びついている。そこで、無生名詞を抽象的な概念・行為・現象を指す名詞と具体的な物質・物体を指す名詞とに分けてリストを掲げる。

(抽象名詞)

μετά			μέ		
χαρᾶς	「喜び」	14	δύναμιν	「力」	3
σκουδῆς	「急ぎ」	7	θρῆνον	「悲嘆」	2
κεριχαρίας	「大きな喜び」	6	κόνον	「苦労」	2
κόθου	「熱意」	6	ἀγάκην	「愛」	1
κόνου	「苦労」	4	ἀνακέτασμα	「まばたき」	1
ὅρκου	「誓い」	3	βοηθείαν	「援助」	1
δυνάμεως	「力」	2	βουλήν	「助言」	1
ἡμέρας	「日」	2	δόλον	「苦労」	1
θυμοῦ	「怒り」	2	κάλλη	「美」	1
μόχθου	「苦労」	2	λόγους	「言葉」	1
ὀργῆς	「怒り」	2	κροσοχήν	「注意」	1
τόλμης	「勇猛」	2	κόθους	「熱意」	1
αἰσχύνης	「恥」	1	συντρίβην	「殺到」	1
ἀληθείας	「真理」	1	ὑποκρίσεως	「見せかけ」	1
βίας	「力」	1	χαρᾶν	「喜び」	1
βουλῆς	「助言」	1			
δόξης	「栄光」	1			
δορυφορίας	「名誉」	1			
δρόμου	「走ること」	1			
ἐκκλήξεως	「驚き」	1			
εὐγνωμοσύνης	「感謝」	1			
εὐλογίας	「祝福」	1			
θρήνων	「悲嘆」	1			
ἰσχύος	「力」	1			
κλεψίας	「盗み」	1			
κόπου	「苦労」	1			

κρούματος	「打撃」	1			
λύπης	「悲しみ」	1			
ναυμαχίας	「海戦」	1			
πλούτου	「富」	1			
προσοχῆς	「注意」	1			
ταραχῆς	「動き」	1			
τάχους	「急ぎ」	1			
φήμης	「盛大」	1			
φιλότητος	「友愛」	1			
φόβου	「恐怖」	1			
φωνῆς	「声」	1			
χαμαιζηλίας	「座ること」	1			
計		78	計		19

（具体名詞）

μετά			μέ		
δακρύων	「涙」	10	ἄνθη	「花」	3
λίθων	「宝石」	6	κοντάρι	「槍」	3
λιθομαργάρων	「真珠」	3	δάκρυα	「涙」	2
χειρῶν	「手」	3	μαργαριτάρι	「真珠」	2
γραμμάτων	「文字」	2	χρυσίον	「黄金」	2
βλαττίων	「紫紺の絹」	1	αἷμα	「血」	1
γαστρίων	「宝石」	1	ἄμπαριν	「竜涎香」	1
θυρίδων	「窓」	1	ἄρματα	「武具」	1
κλήματων	「ブドウのつる」	1	δένδρα	「木」	1
κόκκου	「緋色の染料」	1	δέρματα	「皮」	1
κουδῶνων	「鈴」	1	ἔργα	「細工」	1
λιθαρίων	「宝石」	1	κλήματα	「ブドウのつる」	1
σέλλης	「鞍」	1	κρόκον	「クロカス」	1
σμυρίδων	「金剛砂」	1	μαγνάδι	「ヴェール」	1
στολισμόν	「装飾品」	1	μαλλιά	「毛」	1
χαλκοῦ	「青銅」	1	μόσχον	「じゃ香」	1
χρυσίου	「黄金」	1	μποστελήνας	「胸帯」	1
χρυσόβολλου	「金の封印」	1	πετράτζια	「宝石」	1
			πετσιά	「皮」	1
			πτερά	「翼」	1
			ραβδί	「戦棍」	1
			σέλλαν	「鞍」	1
			σπαθίν	「剣」	1

	στολίδα	「装飾品」	1
	τζαπράτζια	「装飾品」	1
	ὕγκλας	「腹帯」	1
	φορέματα	「衣装」	1
	χέρι	「手」	1
	χρυσάφι	「黄金」	1
計	37	計	36

μετά は具体名詞よりも抽象名詞との結合例の方が多い。χαρᾶς「喜び」、σπουδῆς「急ぎ」、κόθου「熱意」、κόπου「苦労」といった名詞は、もっぱらμετά と結びついて、「喜んで」「急いで」「熱心に」「苦労して」のような、様態を意味する前置詞句を形成している。また、μετάと結ぶ具体名詞のうちでもっとも多い δακρύων「涙」も「涙ながらに」「泣きながら」といった様態のニュアンスをもっている点で、むしろμετὰ χαρᾶς「喜んで」のタイプに近い。

これに対し、μέは、逆に、具体名詞の例の方が多く、μετάとほぼ同数の用例を持つ。しかも、その種類はμέの方が多い。κοντάριν「槍」、σπαθίν「剣」、ραβδί「戦棍」などは μέと結ぶ例しかない。

さて、μέと結ぶ無生名詞の例が多い点は、今まで見てきたanimancyの観点から説明できる。μέはanimancyの低い項と結びつきやすいと予想していたからである。ところが、μέは無生名詞の内で、具体名詞との方が結びつきやすいという点は、この観点ではとらえ切れない。さらに、同じ具体名詞でも、λίθων「宝石」λιθομαργάρων「真珠」はμετάと結ぶ例が6，3例もある。これらのことを説明するためには、前置詞句内の項の意味素性ばかりでなく、それを越えて、前置詞句と述語との意味的結びつきをも考慮に入れなければならない。

§3．μετά・μέとInstrumentality（具格性）

代名詞・人間名詞・動物名詞に関するこれまでの例は一例((14)μ' αὐτῶν「それらによって」）を除いて、全てComitativeの機能であったが、無生名詞の場合は、Instrumentalの機能が主である。しかし、同じInstrumentalと言っても、典型的に「道具」と呼べる場合もあれば、「材料」のニュアンスを持つ場合やComitativeに近い場合もある。そこで、前置詞句が典型的に「道具」として用いられている場合を「Instrumentality（具格性）が高い」と呼ぶことにしよう。このInstrumentalityは二つの尺度から考えられなければならない。

一つは、前置詞句内の項の意味素性である。有生名詞よりも無生名詞の方が「道具」として典型的であるということに加えて、無生名詞の内でも、抽象的な概念より、具体的な個物を指す場合の方が「道具」のニュアンスが強いと思われる。例えば、「喜びでとび上

がる」よりも「翼でとび上がる」の方が、Instrumentalityが高い。

もう一つは、前置詞句と述語との意味関係である。「素材」「材料」のニュアンスを持つ場合は、Instrumentalityが幾分低くなる。例えば、「剣で切り裂く」よりも「剣で武装する」の方が低いInstrumentalityを持つと考えられる。後者は、前置詞句内の名詞の指示物が行為の結果の中に組み込まれて一体化してしまうのに対し前者はそれが独立性を保っている。「染料で染める」ならば一層Instrumentalityは低くなろう。

さて、今まで見てきたように、μέは有生名詞よりも無生名詞との方が結びつきやすかった。また、無生名詞の中でも、具体的な事物を指す名詞との結合例が多かった。したがって、第一の尺度から見て、μετάよりもμέの方が高いInstrumentalityを持つと言えそうである。

次に、μετά、μέともに具体名詞と結ぶ例があるとは言え、述語との結びつきという点では、以下に示すように、μετάの方が限られている。

まず、μετά・μέ句ともに次のような意味グループの述語と用いられる。

μετά：	「編む」	πλεκτός
	「飾る」	καλλύνω、πλουμιστός、χυμευτός
	「おおう」	καλύπτω、σκεπάζω、στιλβώνω、συσκιάζω
	「染める」	βάπτω
μέ ：	「編む」	πλεκτός
	「飾る」	δοξάζω、στολίζω、χυμευτός
	「おおう」	σκεπάζω
	「染める」	βάπτω

例えば、

(21)ἦτο ἡ χαίτη του πλεκτὴ μετὰ βενέτων λίθων. 1547

「(その馬の)たてがみは青緑の宝石で編まれていた（＝宝石が編み込まれていた)。」

(22)εἶχε δὲ ῥίζας χυμευτὰς μετὰ λιθομαργάρων. 1215

「その縁は真珠で飾られていた。」

(23)ὅπως ἀλλάξω τὴν στολὴν κοὐ βάφῃ μὲ τὸ αἷμα, 3031

「私は血で染まった衣を替えようと、」

これらは、前置詞句内のλίθων「宝石」、λιθομαργάρων「真珠」、αἷμα「血」などが行為の結果の中に組み込まれてしまうという点で「素材」のニュアンスを持つ。ただし、「おおう」だけは次のような、μέの方が、μετάよりも幾分高い Instrumentalityをもっていると言い得る例文のペアが見出される。

(24)τὸ ἔδαφος ἐσκέπασε μετὰ τιμίων λίθων. 4038

「(宮殿の)床を高価な宝石でおおった。」

(25)καὶ μὲ τὸ μαγνάδι της τὴν ὄψιν της σκεπάζει. 2987

「(彼女は)そのヴェールで自分の顔をおおう。」

他方、以下のような述語はμέとの結合例しか見出されない。

μέ	:「描く」ζωγραφίζω、「しばる」σφίγγω
	「追いつく」φθάνω、「逃げる」φεύγω

(26)καὶ ἂν φύγῃ φθάνει τὸν ταχὺ μὲ τὰ πτερὰ ὀπόίχει, 185

「たとえ彼が逃げても、(エロスは)自らの持つ翼ですぐに追いつく。」

(27)ἄρκούδα δὲν εἶναι δυνατὸν μὲ τὸ σπαθὶν νὰ φύγῃ. 1423

「熊は剣で 逃げたりはしない。」

先の述語グループに比べて、ここでは「道具」のニュアンスがより強くなっている。

さらに、「ある武器で誰かを打つ」という文脈では、全てμέが使われている。

(28)μὲ τὸ ραβδὶ τὸν ἔδωσα στὴν κεφαλὴν ἀπάνω, 3151

「(私は)戦棍で彼の頭を打った。」(cf.(6))

なるほど、μετάも「打撃」に関係する文脈に現われるが、その場合は、

(29)ραβδέαν αὐτοὺς ἔδωκεν μετὰ μικρᾶς ἰσχύος, 2082

「少しの力で彼らに戦棍の一撃を与えた。」

(30)καὶ μετ'αὐτὸ τοῦ κρούσματος ἔπῆρε τὸ ραβδίν μου, 3076

「(彼は)打撃によって私の戦棍を奪った。」

のようにμετά句内には抽象名詞が含まれる。

このように、同じ具体名詞と結びつくとは言っても、μετάは「素材」としての用法に限られており、典型的な「道具」を表現しようとする場合は、μέが使われる。そこで、第二の尺度からも、μέの方が高いInstrumentalityを持つと考えられる。

§4. まとめ

μετάとμέに関して、代名詞から無生名詞まで考察してきたことをまとめてみる。

μετάは用例数も多く、どのような項とも結びつくのに対し、少数派であるμέはその分布が片寄っていて、つぎのような項とは結びつきにくかった。

代　名　詞
人　間　名　詞
固　有　名　詞

逆に、μέが結びつきやすかったのは、

動　物　名　詞
集　合　名　詞　・　総　称　的　用　法
無　生　名　詞

また、代名詞が人間以外を指す場合、μετά ではなく、μέ が用いられていた。したがって、意味論的な観点より、μέ は支配する項のanimacyが低い場合に用いられやすい、と結論される。

さらに、μέ は無生名詞の内でも、抽象名詞よりは具体名詞とともに用いられやすく、かつ、述語との意味関連において、「材料」としてのみならず、「道具」としても用いられていた。したがって、μέ は高い Instrumentalityを表現するのに使われると結論される。ことに、「道具」表現においてはμετά が用いられず、μέ にもっぱら頼っている。少数派μέ の存在理由はこのあたりにあるように思われる。

Jannaris (1987. p. 386ff.) によれば、μετά +属格形は、'union,' 'manner' の意味以外に 'instrumental' の意味でも用いられるが、この意味は、Classical Period (500 B. C. −300 B. C.) においてはまれであった。とすると、μετά にとって、instrumentalはもともと表しにくい意味領域であって、その傾向が『ディゲニス』にも現れており、その弱い意味領域を、新しい形式であるμέ がカバーしているように思われるのである。

§ 5. おわりに

以上、μετά とμέ の使い分けを、前置詞句内の項の意味素性及び前置詞句と述語との意味的連関から検討してきた。もとより、これは一つの観点からの考察であり、異なるレベルでの説明も不可能ではない。例えば、μέ はμετά から生じた形式であるのだから、μετά の方が古風で、μέ はより新しいニュアンスをもっているはずである。そこで、

(31) εἰ δὲ καὶ δὲν αἰσχύνεσθε δεῦτε <u>μετὰ τῶν ἵππων</u> 3123

「もしそれを恥としないならば、<u>馬にのったまま</u>かかってくるがよい。」

(32) καὶ μέσον τὸν ἐχώρισε ὁμοῦ <u>μὲ τ' ἄλογόν του</u>, 2070

「<u>馬もろとも</u>そいつを真中で切り裂いた。」

のような例においては、古代語の形式である古風な ἵππων がμετά と、現代語のἄλογον がμέ と結びついており、文体的な調和が保たれているとも考えられる。

また、本稿では考察の対象からはずしたσύν +与格形と与格形はμετά 以上に古風であり、例えば、次のような宗教に関連した文脈で、荘厳な調子を出すためによく用いられている。

(33) καὶ <u>σὺν θεῷ</u> σὲ ἀγάπησα, ψυχή μου καὶ καρδία, 1969

「<u>神の御心のままに</u>あなたを愛したのだ、 我が魂、我が心よ。」

(34) ὕμνοῦντας μὲν τὸν παντουργὸν θεὸν τὸν ἐν ὑψίστοις, /<u>σὺν τῷ ἀνάρχῳ λόγῳ τε καὶ πνεύματι ἁγίῳ</u>, 2808−09

「全てを創り給う天の神を、<u>始まりなきロゴスと聖霊とともに</u>讃えつつ、」

(35) καὶ βαπτισθεῖσα <u>ὕδατι ἁγίας κολυμβήθρας</u>, 67

「そして<u>尊き聖水盤の水にて</u>洗礼を受けし彼女は、」

(36) ὁ στερεώσας οὐρανὸν καὶ γῆν θεμελιώσας, /καὶ θάλασσαν τὴν

ἄπειρον ψάμμῳ περιτειχίσας, 4566－67

「(神は)天空を固め、大地の礎を置き、無限の海を砂で囲み、」

こういった観点からの詳しい検討も必要であるが、それらは今後の研究に譲りたい。

付記

本稿は、昭和62年1月、広島大学大学院文学研究科に提出した修士論文「中世ギリシャ語における与格形消失の研究一民衆叙事詩『ディゲニス・アクリタス』を素材として一」の一部に加筆訂正したものである。

注

(1)テキストはΜηλιαράκης, . (1881) Βασίλειος Διγενὴς Ακρίτας. κατὰ τὸ ἐν Ἀνδρῳ ἀνευρεθὲν χειρόγραφον. Αθῆνα. を用いる。最新のテキストとしてはΚαλονάρος(1970)、Trapp (1971) があるが、これらは編者がかなりの部分をTrebizond版によって改訂しており、両写本の言語特徴が交ざっているため、Μηλιαράκηςのものを使うことにした。

(2)μετά＋対格形で「～の後に」を示す例も『ディゲニス』には見られるが、むろんこれらは考察からはずす。

(3)Hatzidakis (1977) p.153

(4)Schwyzer (1975) p.482

(5)Humbert (1930) p.154ff

(6)この箇所は若干問題があり、Καλονάρος (1970 : p.191)ではμὲ τοῦταγὰρ σὺν τούτοις に改訂されている。しかしその場合でも、代名詞は「馬」を指す。

参考文献

Beck, Hans－Georg (1971) Geschichte der byzantinischen Volksliteratur. C. H. Beck.

Comrie, Bernard. (1981) Language universals and linguistic typology. Basil Blackwell.

Dieterich, Karl. (1970) Untersuchungen zur Geschichte der griechischen Sprache. Georg Olms.

Hatzidakis, George N. (1977) Einleitung in die neugriechische Grammatik. Georg Olms.

Humbert, Jean. (1930) La disparition du datif en grec. Paris.

Jannaris, Antonius N. (1987) An historical Greek Grammar. Georg Olms.

Καλονάρος, Πέτρος. (1970) Βασίλειος Διγενὴς Ακρίτας. Αθῆναι.

Mackridge, Peter. (1985) The modern Greek language. Oxford.

Mavrogordato, John. (1956) Digenes Akrites. Oxford.

Schwyzer, Eduard. (1975) Griechische Grammatik. II. C. H. Beck.

Timberlake, Alan. (1977) Reanalysis and actualization in syntactic change.

In Mechanisms of syntactic change. (C. N. Li, Ed.) pp. 141－177. University of Texas Press.

Trapp, Erich. (1965) Der Dativ und der Ersatz seiner Funktionen in der byzantinischen Vulgärdichtung biz zur Mitte des 15. Jahrhunderts. Jahrbuch der österreichischen byzantinischen Gesellschaft 14. p. 21－34

—— (1971) Digenes Akrites. Synoptische Ausgabe der ältesten Versionen. Wiener byzantinistische Studien. BandⅧ. Wien.